

先週の聖書個所の続きが本日の聖書個所で、ともに「サマリアの女性との会話」の部分です。先週の聖書個所である4章5〜26節からの連続性で見ていきたいと思えます。イエス一行はユダヤ地方からガリラヤへ移動しようとしたとき、シカルというサマリアの町に入りました。そこでサマリアの女性と話した内容の後半部分が本日の個所です。けれども、ユダヤ地方からガリラヤへ向かうとき、イエス一行には2つの道の選択肢がありました。一つは海岸沿いの海辺を通っていく道と、もう一方は内陸を通っていく道です。内陸を通る道はサマリアを通っていく道になります。そしてイエスはこの内陸の道を通ってガリラヤに向かいました。けれども、わざわざサマリア地方を通る内陸の道を選ぶ必要はなかったのです。当時、ユダヤ人はサマリア人と民族的に仲たがいでいたので、5節にあるように、シカルという町を通り抜ける必要が本来はなかったのです。

けれども、イエスには霊的な必然性があつたことがサマリアの女性との会話することで明らかになるのです。まず、初めは霊的に人間を生かす水のことが出てきます。7節でサマリアの女性は人目を避けて井戸に水を汲みにきました。そこには井戸のそばで旅に疲れて休んでいたイエスがいたので。そして、イエスがそのサマリアの女性に話し掛けるのですが、ここでは3つの意外なことが起こっているのです。第一に、当時、公衆の面前で男性が女性にいきなり話し掛けるようなことはしませんでした。第二に、ユダヤ人がサマリア人に話しかけることも普通はありませんでした。なぜならユダヤ人とサマリア人は何百年にもわたって犬猿の仲にあつたからです。ダビデがイスラエル王国を建国してから、しばらくの間イスラエル王国は繁栄しました。ところが、王国は北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂したのですが、そのために、北イスラエル王国は南ユダ王国のエルサレム神殿での犠牲祭儀に参加できなくなり、独自にゲリジム山に神殿を造ってそこで犠牲祭儀の礼拝をするようになったのです。¹ その北王国は前7世紀にアッシリアの侵略を受けて滅びてしまいます。そして北王国にいたユダヤ人はアッシリアに捕囚民として連行されて、異教の影響を受けて純粋なユダヤ教とは違った信仰を持つようになったのでした。それがサマリア人です。ですから、もともとサマリア人とユダヤ人は同じ民族だったので、イエスの時代には違った宗教を信じている人間同士として互いに忌み嫌いあうようになり、避け合うようになっていたのです。

そして、このサマリアの女性は水を汲みに来る際に、何か桶かコップをもってきていたはずですが、イエスはこの女性に水を飲むための器をも貸してくれることを前提にして「水を飲ませてくれ」と依頼したので。けれども、サマリア人がユダヤ人と同じ器を使うことは絶対にありえないことでした。ここで使われているギリシャ語はシンクロマイという言葉で「共有する」という意味の言葉です。つまり、イエスはサマリアの女性が持つてきていた器に井戸の水を入れて自分に飲ませてくれと頼んだのです。ですから9節で『ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか』と返答していることでも、このことはわかります。この会話のやり取りは何気ない会話のようではありませんが、これまでの説明でお分かりのように、この女性は非常に驚いているのです。ところがイエスは10節で『もしあなたが、神の賜物を知っており、また、「水を飲ませてください」と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう』と言ったことで、サマリアの女性は、神の賜物とか、水を飲ませてくださいと言ったイエスが何者であるのか、さらには、生きた水（＝聖霊）とは何のことだろうかということに気になるのでした。11節〜12節を見ると、この女性のイエスに対する認識は、ユダヤ人が何故自分に頼みごとをしてくるのだろうかという驚きの感情から、イエスは何者だろうかという人間の根本的な関心事に心の向きが変化していることがわかります。ですから11節冒頭で「主よ」とイエスに呼びかけているよう

に、随分大きな認識の変化が起こっているのです。12節で女性が『あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか』と問うて、自分たちの先祖ヤコブがこの井戸をくれたということから説き起こして、イエスに問いかけます。ヤコブというのはイスラエルの先祖の開祖ヤコブがイスラエルと改名したことで民族が誕生するきっかけを作った人物がヤコブです。その後のヤコブの子孫たちも、彼らが飼育していた家畜もこの井戸から水を飲んで命をつないできたことに言及します。それなのに、ヤコブよりも偉いようには見えない一介のユダヤ人であるイエスが、ヤコブ以上の水をわたしにくれることができるのか？ とこの女性は疑問を呈しているのです。この女性の意識は、この段階ではなお、この世的な意識の段階にとどまっています。ところが、13〜14節でイエスは『この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る』と言って、物理的な水とは違う、生ける水である霊的な水を対比させます。この霊的な水というのは、神が与える聖霊のことです。この聖霊が人間に真実なる神を知るように導いて、魂の渇きを根本的に満たす生ける水になるのです。

この話を聞いたサマリアの女性は、15節で、その生ける水をくださいと率直に懇願します。すると、イエスは『あなたの夫をここに呼んできなさい』と意外なことを言うのでした。けれども、この言葉はこの女性の渇いている魂の現実を明らかにさせます。これまで5人の夫がいたが、5回の結婚と離婚を繰り返し、今連れ添っている人物は正式な夫ではないことが明らかにされたのです。この女性の魂の渇きがどうして起こったのか、詳しい事態の内容は明らかになってはいませんが、この女性が抱え込んでいる魂の渇きの現実の一端が垣間見てとれることになったのです。そこで、この女性はイエスが預言者だということに気づきます。そこでイエスは霊と真理をもって礼拝をすることの大切さを語ります。そこで、この女性はメシアがこの世に来られることを連想して告げると、イエスがそのメシアとは私のことだと自己啓示をします。まだ、この時点で弟子たちにも自分自身がメシアであることを話していないのに、イエスはサマリアの女性にご自身がメシアであることをここで明言してしまう²のです。しかも、ユダヤ人とは敵対的なサマリアの女性にメシアの秘密を打ち明けたのです。しかも、この女性の魂の渇きを癒すことへと導いたことで、この女性は27節以下でサマリアの町に戻って行って、イエスがメシアかもしれないと伝えに行くのです。つまり、魂の渇きが生ける水によって癒されたことで、このサマリアの女性はイエスを救い主キリストであると伝道活動を行う者に変えられたのです。そこでその話を聞いた町の人たちがイエスのもとにやってくる、町の人々はイエスに自分たちのところにとどまってくれるように懇願したことで、2日間イエスはサマリアに滞在することになり、彼らはイエスを信じる人々になったのでした。ユダヤ人から見れば、敵対関係にあつてサマリアの女性を起点にしてメシア信仰に目覚めるのです。

一方、買い物に出ていた弟子たちがイエスのもとに帰って来て、イエスに食事を勧めると、イエスは『わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある』(32節)と謎めいたことを言いはじめたのです。これは霊的な糧のことです。買い出しに行く前は、イエスは疲れて果てて空腹で乾ききっていたのに、買い出しから帰ってくると、イエスは見違えるほど元気になっていました。そこで「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言い出したのです。イエスはサマリアの女性に聖霊を通して神に至る道を示したのです。イエスを通して神に至る道が開かれて、それによって霊的に魂の渇きが癒される生ける水に気づいたので。次に、イエスは魂の渇きを満たす生ける水だけでなく、霊的な食べ物について弟子たちと話し始めます。その食べ物とは、イエスをこの世にお遣わしになった神の御心を行い、その業をなし遂げる者のことだということです。魂の渇きを癒された者はイエスを通して真実な神を知ることと目覚めた者は、次に神の御心を行う者へと変えられるのです。いわば、私たちクリスチャンの霊的な生き方が示されているのです。そういう意味で、イエスはサマリアの町を通る霊的な必然性があつたのです。